
NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2021.2

国立国会図書館
月報



本の森を歩く 江戸時代の料理本

日本図書館紀行 京都府立図書館

表紙画家セレクション

718号 2021年2月

国立
国会
図書館
月報

NO. 718
FEBRUARY
2021
CONTENTS

1 お殿様のパイプオルガン

— 『南葵文庫附属御大札奉祝記念館大風琴』
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

6 本の森を歩く 第25回

江戸時代の料理本

— 読んで楽しい、作って美味しい？ (後編)

13 日本図書館紀行 京都府立図書館

20 表紙画家セレクション 第二輯

12 館内スコープ

世界の立法動向ウォッチ

24 本屋がない本

『濱田徳海旧蔵敦煌文書コレクション目録』

25 NDL Topics



表紙：「暖爐」武井武雄 画
『コドモノクニ』11巻2号 1932.2 26×38cm
<請求記号 Z32-B158>

お殿様のパイプオルガン

—『南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴』

工藤 哲朗



南葵楽堂（別名：御大礼奉祝記念館）の正面。南葵楽堂は英国の建築家B.トーマスが設計し、W.M.ウォーリスによる修正を経て建設された。正面の外観はドイツのパイロイト祝祭劇場に倣ったものともいわれ、4本の柱と入口の階段には水戸産の花崗岩が用いられた。なお、「南葵」は紀州徳川家の旧領地（南紀）と家紋（葵）に由来する。

南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴

[南葵文庫] [1920] 17×24cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1906706>

「音楽の殿堂」——そう呼ぶに相応しい音楽ホールが、かつて東京の麻布に存在した。そのホールの名は「南葵楽堂」といい、巨額の私財を投じてこのホールを建てたのは、徳川頼貞（1892・1954）という人物だった。

頼貞は徳川御三家のひとつ、紀州徳川家に生まれた。自家の有する莫大な富と、英国留学を経験した父・頼倫の影響を背景に、頼貞は当時まだ珍しかった簧管の蓄音器や、楽器の演奏などを通して、幼少の頃から西洋音楽に親しんだ。やがて音楽好きが高じた頼貞は、21歳の時に音楽研究のため英国・ケンブリッジ大学へと留学し、その留学中にある夢を描き始める。

当時、麻布の徳川邸では既に父・頼倫が私設の図書館「南葵文庫」を設置し、公開していた。頼貞はそこに音楽専用のホールを併設し、日本で西洋音楽の普及を図ることを構想したのだ。そして、その音楽ホールに「なくては叶はぬ、それがなければ音楽堂を建てる甲斐がない」とさえ頼貞が考えたもの——それがパイプオルガンだった。

その頃の日本には、教会での礼拝等のためのパイプオルガンは既に数台あったが、それらはいずれも小規模であるか、ごく限られた人しか音色を聴けないものだった。頼貞自身も、幼少期にリードオルガンを習い、学習院



(右) 南葵楽堂建築時の徳川頼貞。
『ニコニコ』78:1917.7 ニニコニコ倶楽部
<請求記号 雑35-5>

(左) 『南葵文庫附属御大札奉祝記念館大風琴』表紙。
(以下、特に記載のない画像はこの資料から。)



横浜港から南葵楽堂前に到着したパイプオルガンの部品。部品は全部で木箱60箱ほどの量があり、手前の木箱には「ABBOTT & SMITH / ORGAN BUILDERS / LEEDS」と書かれている。中央で荷物を見守る3人の人物の中には、和装の頼貞の姿（右端）も見える。

在学中にまとめた『楽器研究論』に「風琴楽の研究」の項を設けたものの⁽¹⁾、留学するまでは本格的なパイプオルガンの音色を聴く機会はずなかつたと考えられる。頼貞が南葵楽堂に設置したパイプオルガンは、日本で初めての演奏会用パイプオルガンであり、その規模は当時「東洋最大」と謳われた。

頼貞は留学先から手紙で父・頼倫らの了解を取り付けると、すぐさまホール全体の設計を建築家へ依頼するとともに、英国リーズ市のアボット&スミス社へパイプオルガンを発注した。当初、パイプオルガンは半年ほどで出来上がる見込みだった。

ところが、第一次世界大戦の勃発で製造に当たる職人は徴兵され、パイプの材料となる金属の使用も制限されてしまう。頼貞は1915年12月に帰国し、南葵楽堂は1918年に開堂式を迎えるが、パイプオルガンの部品がようやく横浜港に到着したのは、注文から約5年を経た1920年春だった。

さらに、到着後にももう一悶着あった。当時、ほとんどの日本人はパイプオルガンを見たことも聞いたこともない。そのため、税関は組み立て前のパイプオルガンの部品を建築資材と見なして、パイプオルガンの代価を超える高額な税を掛けようとしたのだ。結局、頼貞は交渉の末にパイプオルガンを教育用品



組み立て途中のパイプオルガンの様子。右から2番目の人物が頼貞。右端で鍵盤に向かっているのは、山田耕筈の義兄・エドワード・ガントレットと思われる。宣教師として来日したガントレットはオルガニストでもあり、南葵楽堂のパイプオルガン建造にも協力した。
『歴史写真 大正9年10月號』歴史写真会 大正9
<請求記号 408-99>



床に並べられたパイプオルガンの部品。写真奥に見えるのは金属製のパイプと、巻かれた送風管。手前側には、風箱（パイプを挿す箱。左側）と木製のパイプ（右側）が見える。南葵楽堂のパイプオルガンには約1,400本のパイプが用いられている。



組み立て途中のコンソール（演奏台）。手鍵盤の両脇にあるノブのようなものは「ストップ（音栓）」といい、これを引くと様々な音色の音を選択できる。右の写真では、クラリネットやトロンボーンなどを模した音色のストップに交じり「尺八」と名付けられたものも見える。なお、南葵楽堂のパイプオルガンは、今日では珍しい「ニューマティック・アクション」という方式の機構を有し、個々の鍵の動きは送風管を通して空気圧で伝えられた。

として無税で通関させたが、このことは、パイプオルガンが当時の日本人にとっていかに馴染みのないものであったかを示している。こうした困難に見舞われつつも、パイプオルガンは南葵楽堂に無事到着し、7月に設置工事を開始、11月初旬ついに完成した。『南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴』は、この工事から完成までの様子を映した写真25枚が貼り込まれた写真帖であり、日本における本格的なオルガン音楽受容の始まりをとらえた貴重な記録である。

この写真帖の制作経緯や来歴は謎に包まれているが、各写真のキャプションを活字で印刷した薄葉が挿入されていること、管見の限り当館以外に所蔵機関が確認できないことなどから考えると、徳川家がパイプオルガン完成の記念にごく少数制作したものかもしれない。

完成した頼貞のパイプオルガンは、熱狂をもって迎えられた。完成と同月の披露演奏会は当初2日間が予定され、1日目の聴衆は皇族はじめ招待客に限られたが、2日目は事前にチケットを無料配布の上で、一般公開されることになった。しかし、配布当日は群衆が南葵楽堂に殺到し、警官まで出動する騒ぎに。チケットは予定枚数300枚のところ、気づ



完成したパイプオルガン。南葵楽堂は300人あまりの聴衆を収容できる広さがあり、パイプオルガンは高さ4間、奥行2間、幅3間ほどの大きさだったとされる。

けば600枚が配布されてしまい、結局同じ演奏会をもう1日行うことになった。頼貞はこの演奏会の際の感概をこう綴っている。

かくて、私の待望したパイプ・オルガンはその美しい音を楽堂に漲り溢れさせた。……私は、嘗て倫敦に勉学中に描いた夢が、幻影の世界から下つて実相の世界に入り、現実の姿となったことを神に感謝した。⁽³⁾

遂に実を結んだ頼貞の夢は、しかしそう長

くは続かなかった。パイプオルガンの完成から3年足らずの1923年9月に関東大震災が発生、損壊した南葵楽堂は閉鎖を余儀なくされる。頼貞は楽堂の修復と再度の公開を望んだが、修復には楽堂の新築と同程度の費用が掛かると判明し、復旧は諦めざるを得なかった。頼貞のパイプオルガンは、数回の演奏会に使用されただけで、南葵楽堂での役目を終えた。

ただ、幸いにもパイプオルガンは致命的損傷を免れていた。そのため、東京・上野の東京音楽学校奏楽堂へと寄贈・移設され、以後は東京音楽学校、そして東京藝術大学で日本のオルガニスト育成に貢献していく。

こうして安住の地を得たかに見えた頼貞のパイプオルガンだったが、1980年代に再び危機が訪れる。移設先の奏楽堂自体が上野公園に移築されることになったのだが、既に老朽化で使用不能になっていたパイプオルガンは、正面の外観部分以外は移設されないことになってしまったのだ。頼貞のパイプオルガンは、いよいよその使命を完全に終えるものと思われた。

しかし、頼貞のパイプオルガンは再びこの危機を乗り越える。パイプオルガンを移設・修復すべしとの声が、音楽家、建築家そして地元住民から上がったのだ。こうした声が行

徳川頼貞と図書館



南葵楽堂の蔵書印が押された資料（筆者蔵）。

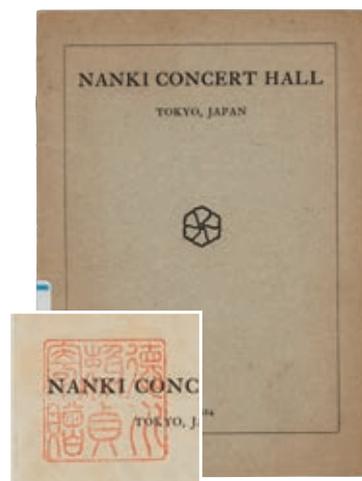


徳川頼貞遺稿刊行會 編
『頼貞隨想』河出書房
1956<請求記号 GK138-G117>

徳川頼貞は音楽のみならず、図書館にも理解のある人物だった。

頼貞は楽譜や音楽書、大作曲家の自筆資料などを収集し、南葵楽堂の半地下のフロアに設けた音楽専門図書館で公開した。さらに、後にはこれらの資料を利用した研究・出版活動の支援も行い、このことは戦後の日本音楽学会設立の基盤にもなったとされている。この図書館事業は南葵楽堂閉鎖後も継続されたが、徳川家の財政悪化のため1932年に中止された。その後、頼貞のコレクションは紆余曲折を経て、現在は和歌山県立図書館で「南葵音楽文庫」として再び公開され、本格的な調査研究・普及活動が進められている。

加えて、頼貞は初期の国立国会図書館の運営にも関与している。戦後に参議院議員となった頼貞は、図書館運営委員会委員として国会で金森徳次郎館長（当時）に対し音楽資料に関する質疑を行ったほか、大久保利謙の「日本国会史編纂所設置二関スル請願」（後の憲政資料室設置につながる）の提出を支援するなどした。こうした当館との縁からか、頼貞の遺稿集『頼貞隨想』の刊行に当たっては、当館職員（のち副館長）だった酒井悌が遺稿整理の中心となり、金森館長も刊行の発起人に加わった。



Nanki Concert Hall : Tokyo, Japan, The Japan Advertiser Press, 1924<請求記号 Y995-B3650>
南葵楽堂の概要や公演記録をまとめた英文の小冊子。扉には「徳川頼貞奇贈」の印が見える。同じ印記を持つ書籍はこのほかにも数点、当館所蔵資料の中に確認できる。

1「風琴」とあるが実際の記述対象はリードオルガン（徳川頼貞 著『楽器研究論』[1910]（南葵音楽文庫所蔵）。

2 当館での受入記録を調査したところ、1982年頃に本写真帖とともに古書店から購入された資料の中に、朝香宮家に関係するものが複数含まれることが判明したが、同家と本写真帖の関係は不明。なお、同家からは5名の皇族が披露演奏会（後述）に出席している。

3 徳川頼貞 著『菅庭楽話』春陽堂書店 1943<請求記号 760.4-To426w>
○参考文献

台東区立旧東京音楽学校奏楽堂 編『旧東京音楽学校奏楽堂公式ガイドブック 日本最古の音楽ホール』台東区芸術文化財団 2020<請求記号 Y6-N20-M268>

林淑姫「ミュージック・ライブラリーの夢：南葵音楽図書館の成立と展開（1）～（3）」『南葵音楽文庫紀要』（1）～（3）：2018～2020<請求記号 Z72-P544>

松居直美、廣野嗣雄、馬淵久夫 編著『オルガンの芸術 歴史・楽器・奏法』道徳書院 2019<請求記号 KD261-M1>

中田恵子「旧東京音楽学校奏楽堂のアポット&スミス・オルガン」『Japan organist』（45）：2018<請求記号 Z11-2262>

村上紀史郎 著『音楽の殿様・徳川頼貞 1500億円のくノープレス・オプリージュ』藤原書店 2012<請求記号 GK138-J102>

篠田大基「南葵音楽文庫資料紹介 『南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴』」『Oxalis 音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』（2）：2009<請求記号 UL581-J4>

鈴木千帆「第1回ロンドン万国博覧会のシュルツェ・オルガン 旧東京音楽学校奏楽堂パイプオルガンのルーツであるのか」『オルガン研究』（35）：2007<請求記号 Z11-638>

吉田実〔ほか〕 編『日本のオルガン』1～3 日本オルガニスト協会、シャローム印刷出版事業部（発売） 1985-2004<請求記号 KD261-9, KD261-J5>

赤井勲 著『オルガンの文化史』青弓社 1995<請求記号 KD261-E7>

「日本音楽学会30年史」『音楽学』33（特別号）：1987<請求記号 Z11-215>

東京新聞出版局 編『上野奏楽堂物語』東京新聞出版局 1987<請求記号 KD11-E1>

小泉信三『小泉信三全集』第25巻上 文芸春秋 1972<請求記号 081.8-Ko542k2>

辻莊一「南葵音楽図書館と私」『音楽事典 月報』（2）：1955.4<請求記号 Y91-E960>

徳川頼貞 著『菅庭楽話』徳川頼貞 1941（私家版 当館未所蔵）
『南葵文庫報告』（13）：1921<請求記号 016.2-N48ウ>



旧東京音楽学校奏楽堂に移設された南葵楽堂のパイプオルガン。
写真：台東区立旧東京音楽学校奏楽堂提供

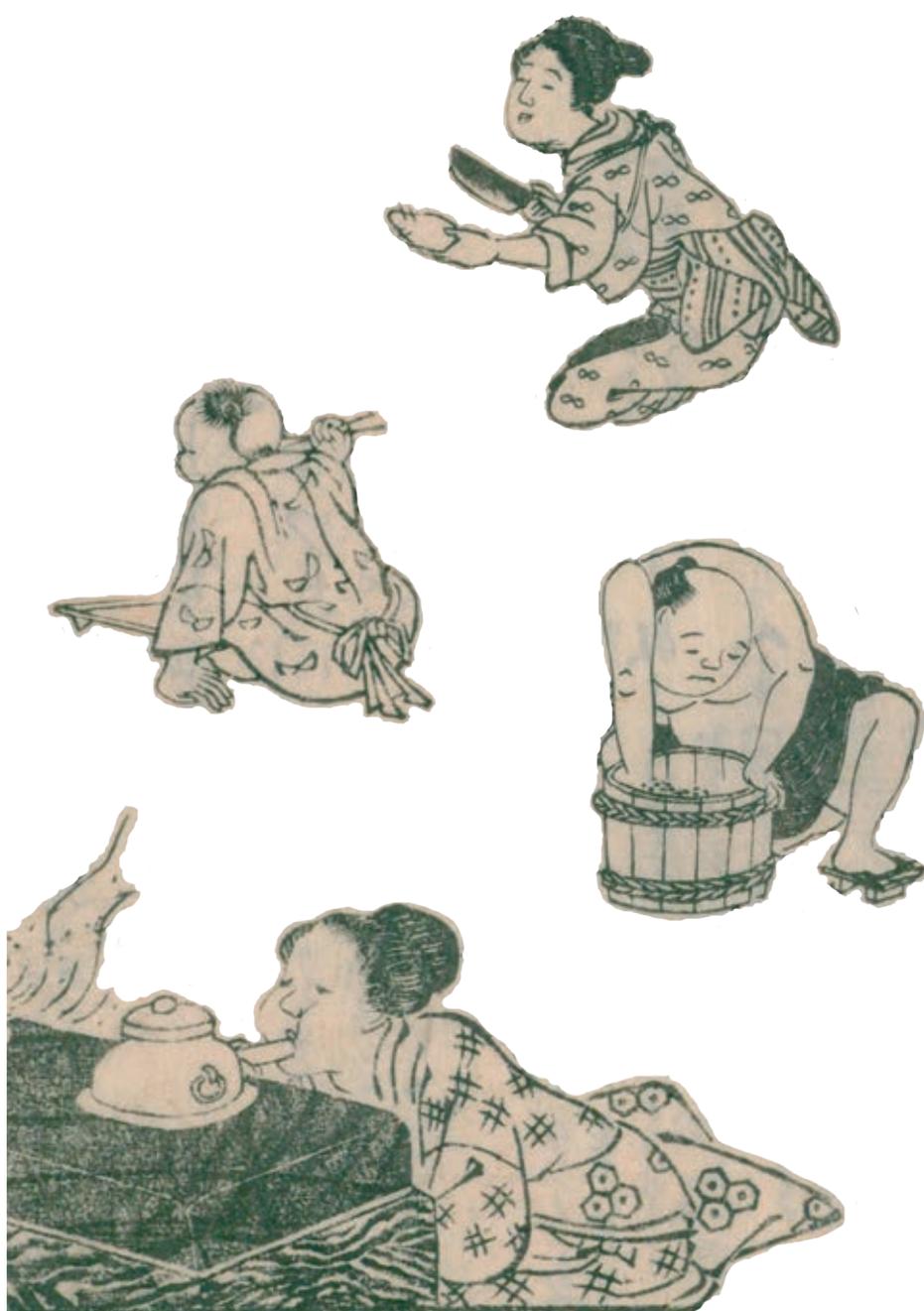
政を動かし、ついに頼貞のパイプオルガンは完全な形での移設と修復がなされた。頼貞のパイプオルガンは、今や多くの人々に支えられる存在になっていた。

南葵楽堂にパイプオルガンが設置されてから100年、頼貞のパイプオルガンが現在もその音色で多くの人々に音楽の喜びを与え続ける一方、パイプオルガン付きの音楽ホールは日本の各地に設置され、国内のパイプオルガン設置台数は約1,000台に達した。

頼貞の夢は、今こそ本当の実を結びつつあるのかもしれない。

江戸時代の料理本

—読んで楽しい、作って美味しい? (後編)



伊藤 りさ

実用書としての料理本 (其の二) 〜救荒食

前編ではどちらかと言えば読み物的な性格の強い料理本を見てきましたが、実用本位の料理本がなかったわけではありません。その最たるものは、飢饉時に役立つ救荒食を扱った本ではないかと思えます。江戸時代には何度も飢饉があり、それに対処するための救荒本も種々出版されました。

そのうちの一冊、『都鄙安逸伝』(天保四年(一八三三)序)の目的は、ざばり「米の消費量をなるべく減らすこと」。米の消費を減らせば自然と米価も下がる道理、手間を惜しまず粗食を心がけ、米価の下がるのを待ちましよう、という趣旨が述べられています。米を減らすには、やはり「かて飯」(混ぜ物を入れたご飯)が手っ取り早く、この本にも様々な「かて飯」の作り方

※資料の書誌事項は著者・編者等と出版年または書写年のみを記し、原則として『料理文献解題』に拠った。当館所蔵資料の書誌事項については、国立国会図書館オンラインで確認できる。





1 竈の賑ひ
左の挿絵では子供が「いもばかりだよ」と文句を言っている



作ってみた!

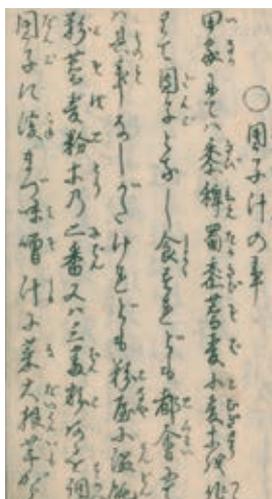
『竈の賑ひ』の「団子汁」

粉屋に温飩粉蕎麦粉等の二番又は三番粉あるを調 団子にこね、まづ味噌汁に菜、大根、芋がら、さと芋等を沢山切込、其中に団子をいれ、焚て喰しなば大ひに米の助と成なり。(中略) 左りの手にもち、右の手に水をつけひらたく引のぼしていれのぼしてはいれすれば食するに和らかにしてつかゆる事なく喰よきもの也



普段、粉をこねた団子は作らないので、読んで理屈ではわかっていても、「平たく引きのぼして団子にする」の手加減と形態がよくわかりませんでした。味は味噌仕立てで、野菜も豊富で「団子汁」だけで栄養豊富で充分おいしく満腹になりました。今の時代は、鶏肉を入れるとおいしいと思います。

※調理とそのコメントは総務課編集係とその応援団による (以下同)

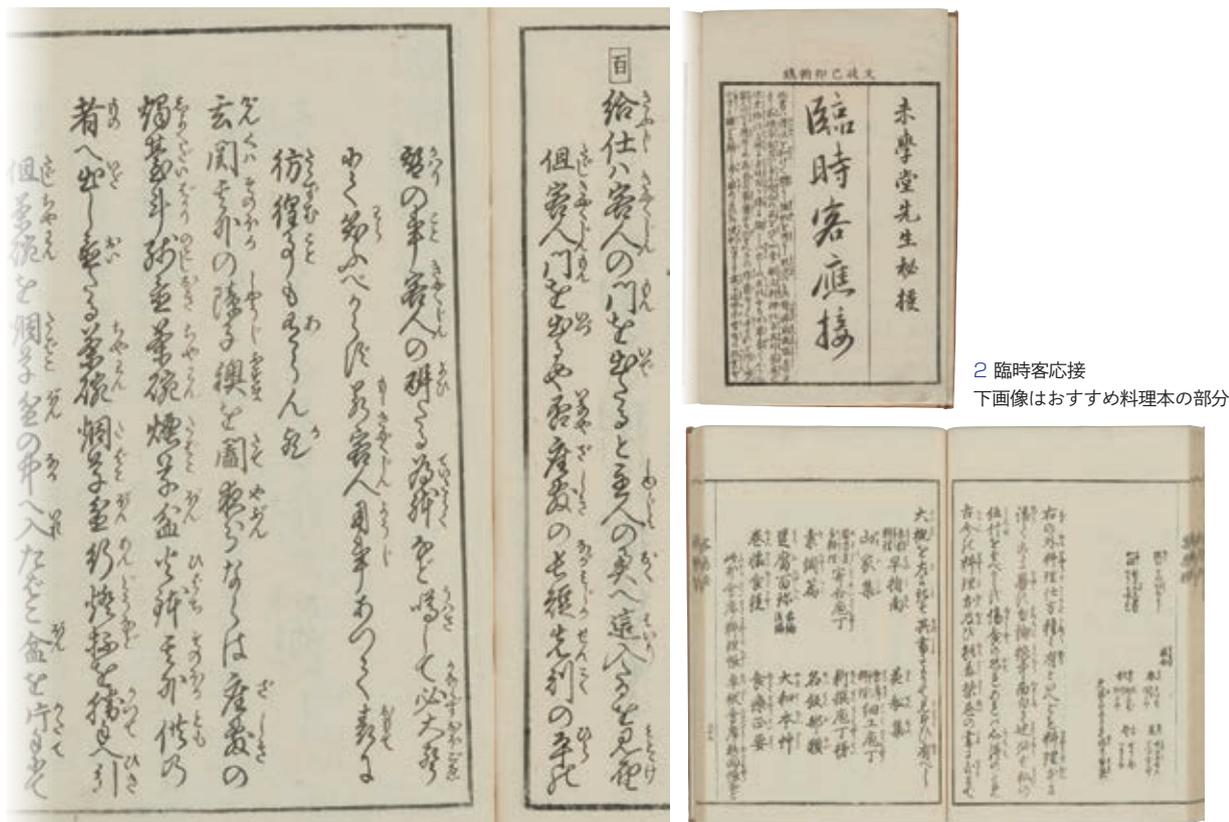


が出ていますが、そのほかにもわざわざ小麦粉やそば粉の二番粉・三番粉を粉屋で買って団子を作る方法などもあります(上「作ってみた!」参照)。これもひとえに食べる米の量を減らすため。また、せっかく炊いたご飯も腐らせてしまったては元も子もありませんから、夏場にご飯を腐らせない方法も説明しています。

本書は人気があったらしく、後に文章などに手直しが加えられて『竈の賑ひ』(画像1)という題名で版を重ねました。さらに『飯百珍』なる題名でも刊行された(3)ことで、『飯百珍』となると、最早救荒本の面影は感じられませんが、いづれにしても、かなり広く読まれていたことがうかがわれます。

飢饉に備えるため、という切実な用途で考えられたレシピではありませんが、現代の目から見るとかえってヘルシーでおいしそうに感じられるものも少なくありません。江戸時代にも、改題を重ねながら多くの人に読まれていたということは、救荒食という実用性もさることながら、料

お客さんが帰っても
すぐに噂話するのは厳禁!



2 臨時客応接
下画像はおすすめ料理本の部分

理としても人々にアピールするものがあつた故なのでしょう。

実用書としての料理本(其の二)
『お客様をおもてなし』

厳密には料理本ではありませんが、客をもてなすという観点から料理についても多くの紙幅を割いているのが『臨時客応接』(和田信定ほか著、文政三年(一八三〇)) (画像2)です。

使用人に対する注意事項が多いようですが、客の訪れからお見送りまでの間の応対について懇切丁寧な説明があり、いまでも十分役に立ちそうな内容です。興味深い項目をいくつか挙げてみましょう。

○菓子を出しても出さなくてもいいが、子ども連れならなるべく出した方がよい。○蕎麦を店から取った時は家の器に移し替えてから勧める。誰が使ったかわからない店屋物の器のまま出すのは客に対して失礼に当たる。ただし店の器や客が誰かにもよることなので、臨機応変に。○客に食事を出す際は、自分の主人にも相談した上で(この部分は「使用人向け」だということがわかります)

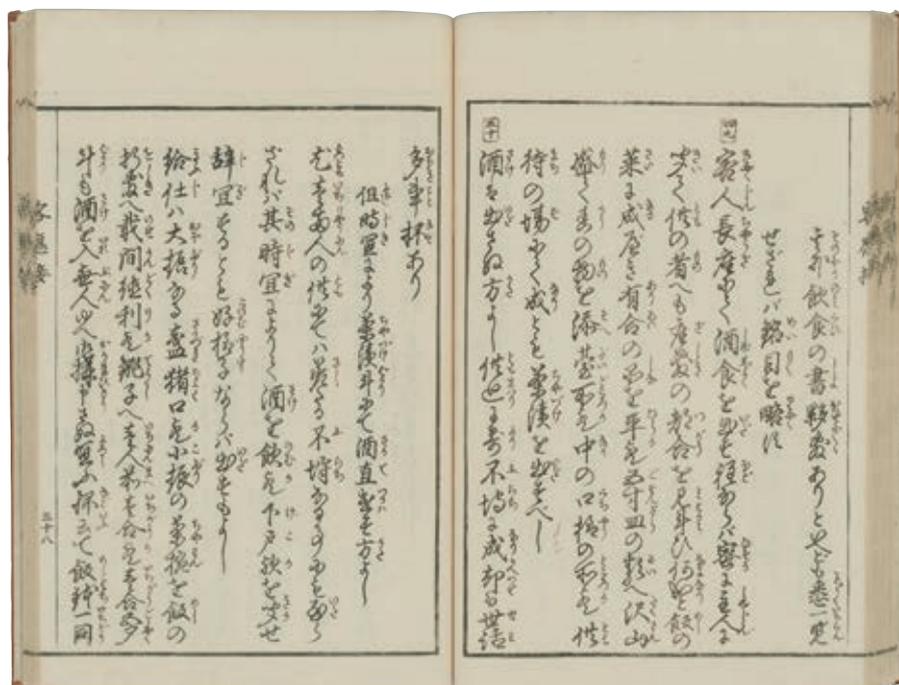
供の者にも茶漬くらいは出す。ただし不埒なことがあるといけないので、酒は出さない方がよい。○あいたお皿はほかの料理を出した時について下げる。○客が酒に酔って嘔吐しそうな時は背中をさすってやる。客が落ち着いたら手水鉢から水を汲んでうがいを勧める。○客が帰っても、用事や忘れ物があつて戻ってくるかもしれないので、すぐ大声で噂話などしてはいけない。

ほかにも果物の切り方、足がしびれた時やしやくりが出そうな時の対処法など、心憎いほど壺を押さえた説明が百項目にわたって述べられています。どのような料理を出すかの項目もありますが、「自分勝手に素材を取り合わせると食あたりになるかもしれないから、料理本をよく参考にするように」と、十種以上の料理本を紹介する用意周到さです。

ところで、客のもてなしに関して、曲亭馬琴に興味深いコメントがありました。馬琴が上方に旅行した際の見聞録『羈旅漫録』(享和二年(一八〇二))には、「京にて客ありて振舞をするには。丸山。生洲。或は



気、つかうわ〜



祇園二軒茶屋。南禅寺の酒店などに。一人に価何匁と定め。家内せましと称して。その酒店え伴ひ行。是別段に客をもてなすの儀にあらず。家にて調理すれば。万事に費あり。その上やゝもすれば器物をうち破るの愁ひあり。故にかくのごとくす。京の人の狡なることは是にて知るべし」と記されています。馬琴らしいといえべきか、かなり穿った意見に聞こえますが、筒井絃一氏（茶道研究家、今日庵文庫長、茶道資料館副館長〔当時〕）は、「京都人の吝嗇が馬琴のいふほどではないにしても」としながらも、「京都に料理屋や仕出し屋が多いのは、そのためであろうかとうなずかせるところもありません」と、馬琴の主張にもそれなりの理解を示しています。もともと、筒井氏は京都出身ではないようですが……。

おわりに

江戸時代の料理本、いかがだったでしょう。一言で料理本と言っても、様々な内容のものがあることや、江戸時代の人たちは、実用一点張りではな

く読み物としても料理本を楽しんでいたらしいということを感じていただけたのではないかと思います。

二〇一三年にユネスコ無形文化遺産に「和食」が登録されたこともあり、江戸時代の料理に対する関心も、このところ頓に高まっているようです。実は、江戸時代の料理本は多くが活字翻刻されており、崩し字が苦手で読むことが可能です。一方で、レシビが読めることと料理が再現できることはまた別問題。江戸時代の料理用語や料理法、食材に関する知識がないと、実際に作るのには素人にはいささかハードルが高いかもしれません。

ただ、江戸時代の料理を自分で再現するのは難しくても、料理本を読むことで江戸時代の料理や食生活に思いをはせるのもまた一興。「国立国会図書館デジタルコレクション」で公開されている料理本も少なくありません。活字翻刻や現代語訳、原本の挿絵などを楽しまつつ、江戸の料理を想像してみたいかがでしょうか。

江戸時代のお弁当

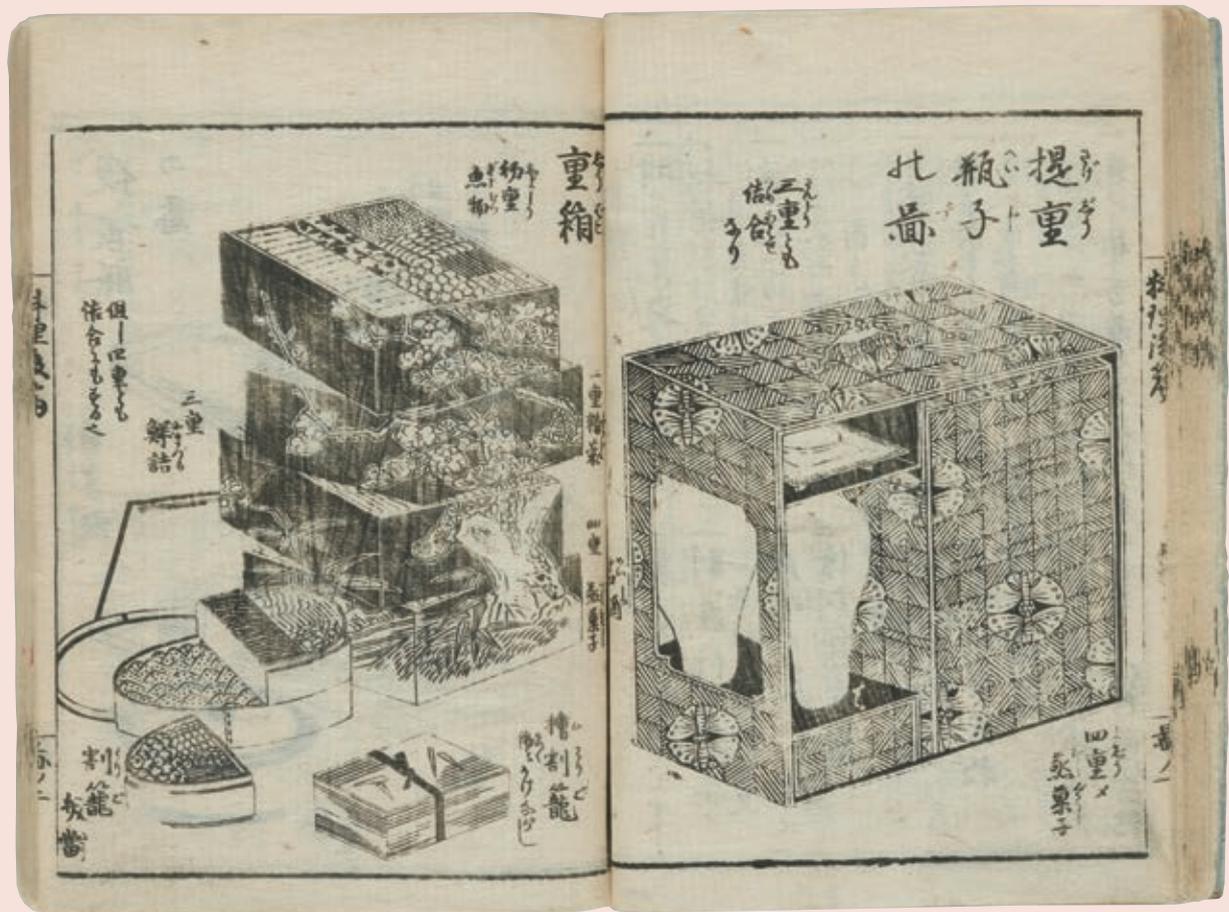
去年は外食が難しい時期があったこともあり、ランチに手作り弁当を持っていくようになったという人も多いかもしれません。書店には多くの弁当レシピ本が並んでおり、どれもカラフルでおいしそう！ところが、江戸時代は意外なほど弁当を扱った料理本はありません。

江戸時代に限らず、弁当（携行食）は大きく日常（屋外での労働などに従事する場合）と非日常（旅行や行楽など）に分けられると思いますが、江戸時代の日常的な携行食は、おにぎりと漬物・味噌・梅干しと言った簡素なものだったようです⁽⁹⁾。普段使いのお弁当はあまりにもシンプルだったため、料理本で取り上げるまでもなかったのかもしれません。

その中で、『料理早指南』第二編（醒醐山人著、享和元年〔一八〇一〕序）（画像3）が非日常の携行食として重詰（重箱）料理を取り上げているのが注目されます。時節見舞、花見、船遊びといったシチュエーションごとに、四段の重箱に何を詰めるか上中下の三パターンを例示し、さらに、季節を問わない時節見舞のようなものは料理の一部を季節により差し替えるなど、実用的な内容です。例えば花見の「上」なら一の重は鮎、筍、早蕨など、二の重はむしがれい、桜鯛など、三の重はひらめやさよりの刺身、よめな、つくしなど、四の重は紅梅餅、椿餅など……といった具合。また、祭礼や供養などで大人数の弁当を用意するときは、重箱ではなく桧割籠（使い捨て容器）で銘々に出すとよい、といった配慮も述べられています。

ところで、弁当に関連して興味深いのが、『会席料理細工庖丁』⁽¹¹⁾（浅野高蔵・法橋玉山画、文化三年〔一八〇六〕）の巻末広告にある『寄合庖丁』の宣伝文句です。『寄合庖丁』は残念ながら現存していないようですが、広告には「此書は家内芝居行花見遊山などに出行たる跡にて近隣又は心やすき友どち打寄、一盃吞べしとおもふ時弁当の余りたる物を取りつくりぬ」と書かれており、家人が弁当を持って行楽に出かけた後、弁当の残り物でちょっと飲みましょう、という時に役立つ弁当おかずリサイクル術が紹介されていたのでしょうか。

3 料理早指南



時代を先取り？ 代用品や時短あれこれ

予算や時間の関係で代用品やインスタント食品を使う時もありますよね。江戸時代には「代用品」「インスタント」あるいは「時短」という意識はなかったかもしれませんが、なかなか斬新かつ現代でも応用できそうなレシピや裏ワザも紹介されています。現代の目から見れば「時短」とは思えない内容でも、「早……」と謳っているところから、江戸時代は現代に比べて調理に相当な時間や手間がかかっていたことが感じ取れるように思います。簡単に真似できそうなものをいくつか紹介しますので、興味のある方は試してみてくださいはいかがでしょうか。

○早餅 冷ご飯をすり、同量の葛を加えてさらによくすってゆでる（下「作ってみた!」参照）。○早葛切 細切りの寒天に葛粉をまぶしてさっとゆでる。○一夜酒 麴を水に漬けてよく揉み砕き、白砂糖を適宜加えて濾して使う。○早じゅんさい 山芋などの巻葉に葛をまぶして熱湯でさっとゆでる。（以上、『料理山海郷』）○諸精^{いものじん} さつま芋を生のまますりおろし、四、五度水を替えながらさらして、底に溜まったでんぷんをよく干して葛粉の代用に使う。（『甘藷百珍』）○古くなったそば粉はこねる時に熱湯を使い、蓼の絞り汁を入れると匂いが出て新そばのようになる。○ゆで卵の黄身を真ん中にするには、常に箸で転がしながらゆでるか、卵がはまる大きさの穴を開けた薄板に卵をはめ、その板を回しながらゆでればよい。○ゆで卵をきれいに切るには、湯に酢を落としてゆで、庖丁にも酢を塗るとよい。（以上、『料理早指南』）



作ってみた!

『料理山海郷』の「早餅」

常の冷めし汁わんに一はいすりて其かさほど葛をいれて又能く摺て湯煮し大豆のこ（きな粉）にて用味噌汁もよし

冷やごはんをすり鉢でつぶすのが思いのほか硬くて、餅状にはなりません。葛粉と水を混ぜてどろどろになったところで成形して、熱湯に投入しました。米を葛粉でコーティングしたようになり、おはぎとお餅の中間といった感じで、まあまあおいしかったです。

※『料理山海郷』は前編(1月号)でも紹介しました。(当館請求記号: 183-143)



【注】

- 1 当館請求記号: W373-N7
- 2 国立国会図書館デジタルコレクション [<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536948>]ほか
- 3 原田信男『江戸の食生活』(岩波書店、二〇〇九年)
- 4 当館請求記号: 111-227
- 5 国立国会図書館デジタルコレクション [<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/888906/27>]
- 6 筒井紘一「上方食文化の位相」『國文學 解釈と教材の研究』二十九(三)(一九八四・三)
- 7「料理書研究の今現在—文献リスト—」『Vesta』(八十七)(二〇一二年)参照。
- 8 国文学研究資料館のウェブサイトで公開されている「江戸料理レシピデータセット」(国文学研究資料館オープンデータセット [https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/data_set_list.html]) のデータに、「くずし字を読み、かつ江戸時代の日本語や料理法を知っていれば料理が作れます」(原本画像)、「江戸時代の日本語や料理法を知っていれば料理が作れます」(翻刻テキスト)「翻刻テキストデータの内容を現代の日本語に翻訳したデータです。江戸時代の料理法を知っていれば料理が作れます」(現代語訳)「現代の道具や食材でも作れるものに変更し、食材の分量や写真を加えてより具体化したデータです。手順に従えば料理が作れます」(現代レシピ)の四種があるのは、そのあたりの事情を反映したものでしょう。
- 9 原田信男編著『江戸の料理と食生活 日本ビジュアル生活史』(小学館、二〇〇四年)
- 10 当館請求記号: 182-25
- 11 当館請求記号: W435-N15

【参考文献】(注、本文に挙げたものを除く)

川上行蔵編『料理文献解題』柴田書店 一九七八年
『江戸時代料理本集成』臨川書店 一九七八—一九八一年
大久保洋子『江戸の食空間』(講談社学術文庫)講談社 二〇一二年
練馬区立石神井公園ふさと文化館編『江戸の食文化 特別展』練馬区立石神井公園ふさと文化館 二〇一四年
原田信男編『江戸の食文化』小学館 二〇一四年
『江戸の美味しさ召し上がれ』西尾市立岩瀬文庫 二〇一五年
「和食：日本人の伝統的な食文化」に関する典籍一覧 国文学研究資料館ウェブサイト [<https://www.nijl.ac.jp/pages/images/washoku.pdf>]
博望子著、原田信男訳『料理山海郷 江戸時代の珍味佳肴を知る』(教育社新書原本現代訳 134)教育社 一九八八年

海外立法情報調査室・課の仕事は、主に『外国の立法』という刊行物を通して、国会の国政審議に役立つ海外の主要国等の立法動向を紹介することです。現在は、英・米・仏・独・伊・露・豪・韓・中の主要国のほか、EUや東南アジア諸国等が掲載対象で、これらの国・地域別に担当が分かれた調査員が、色々な分野の法令を取り上げます。

議会が開かれず、新規立法が止まる事態もある中で、記事を安定的に掲載し続けるため、執筆する調査員には、持ちネタがたくさん必要になります。文学部出身の私には、財政や科学技術などは苦手なネタですが、食わず嫌いはできません。持ちネタを少しでも増やし、それに十分な肉付けができるように、新聞やデータベース、書庫資料等のリソースをフル活用して情報を集めます。『外国の立法』には季刊版と月刊版があり、集めたネタのどれを季刊版で取り上げ、どれを月刊版で掲載するのか、日々やり繰りを考えながら原稿を執筆します。

季刊版では、重要な法令の解説に加え、条文翻訳を掲載します。単に翻訳すればよいのではなく、接続詞を補って文の構造を明確に示し、特有の言い回しを正しく用いるなど、日本の法令らしく仕

上げないといけません。法令を読むだけで四苦八苦していた総務のあの頃、もつと法令ともだちになっておくべきでした。

季刊版を半年かけて完成させる間も、分量の短い月刊版の編集作業がほぼ毎月あり、両者同時に進むので、調査員は、複数の全く異なる分野の法令を、同時に翻訳し紹介していくことになります。月刊版のテーマを集中して調べ続けるうちに、しばらく前に書いた季刊版の原稿が上司から手直しかされて戻ってくると、自分が何を書いていたのか、記憶が怪しくなっていることもあります。

色々な面で日本と違う外国の動向をどう紹介すれば国政審議に有益な情報になるのか、力不足を感じることも多いですが、自分で法令を読み込んでみることで、報道内容とは違う側面の重要性に気づくこともあり、外国法の不思議さと面白さも感じています。外国の動向に日々アンテナを働かせ、外国語漬けになれる業務は、国立国会図書館広しといえども珍しく、語学好きにはおすすめです。

私たちが世界の立法動向をウォッチし続けた成果の『外国の立法』は、当館ホームページからどなたでもご覧いただけますので、ぜひ一度のぞいてみてください。 (海外立法情報課 W)



世界の立法動向
ウォッチ



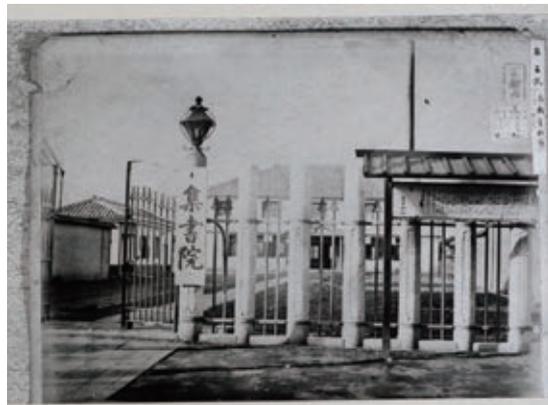
京都府立図書館

平澤 大輔

動物園や美術館、劇場にイベント会場など、数多くの文化施設が集まり、京都を代表する文化ゾーンといわれる地・岡崎。そのランドマークともいべき平安神宮の大鳥居のすぐそばに京都府立図書館はあります。

日本で最初の公立の図書館である「集書院」を源流とし、明治31年に京都御苑内に設立された京都府立図書館は、明治42年に岡崎に移転し、現在に至るまで100年を超える歴史を歩んできました。

移転当時の建物は、京都市役所や賀茂大橋などの設計を手がけ、関西建築の父といわれる武田五一により設計されました。阪神・淡路大震災により建物が大きく損傷したため、平成13年にリニューアルオープンした地上4階・地下2階建ての新しい建物は、ファサード保存の手法によりルネサンス風の外壁正面部を残し、今も当時の姿のまま利用者を迎えています。



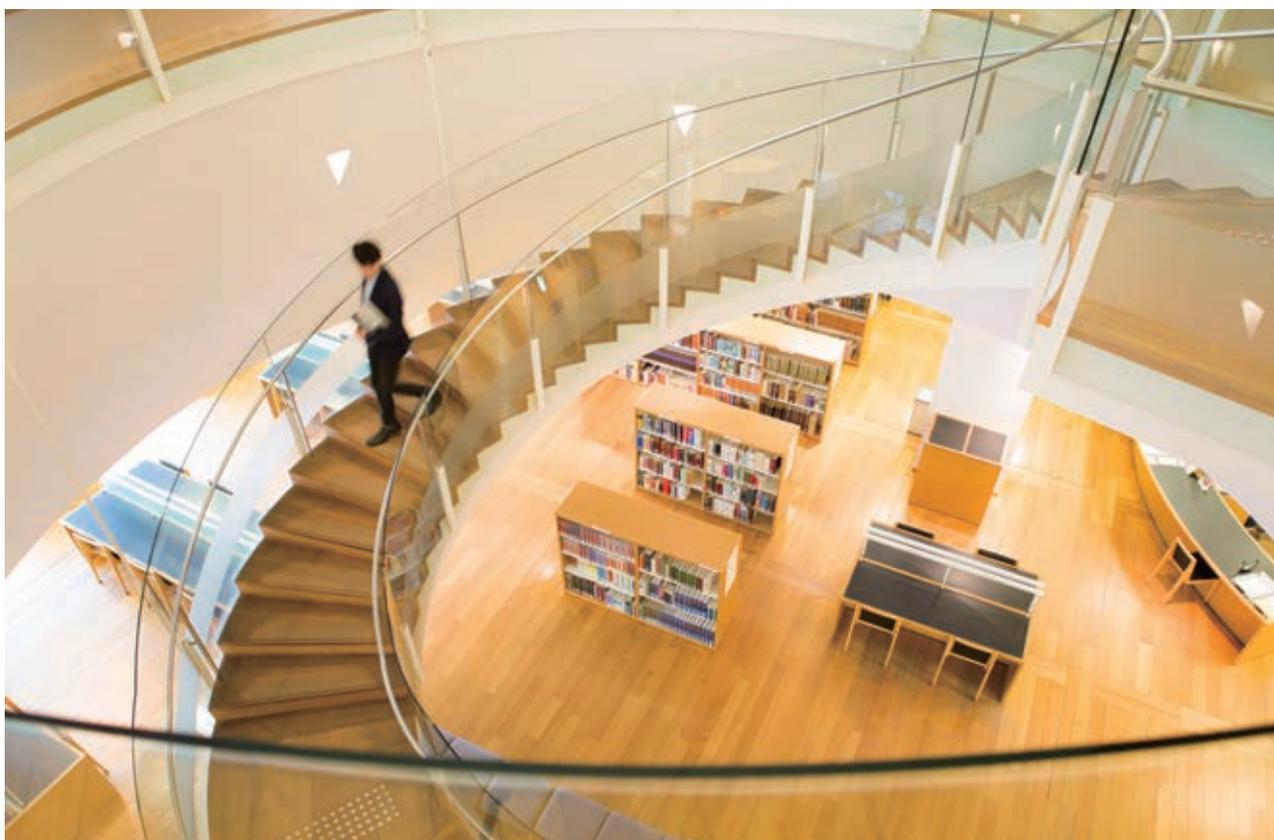
(右上から時計回りに) 集書院、岡崎移転前の佇まい、明治42年移転当時の建物、館長室に残る銘板。



日本映画のシナリオ。昭和40年代に複数の研究者から京都府立総合資料館に寄贈されたものなど約1,400冊で構成されています。



クルーガー文庫の展示。



年間で約27万人の利用者が訪れる京都府立図書館では、専門書や研究書など調査・研究に役立つ本を中心に、図書と雑誌・新聞などの逐次刊行物あわせて130万冊を超える資料を所蔵しています。その中には、第二次世界大戦後の占領下で京都に設置されたクルーガー図書館^(註)の蔵書を受け継いだ「クルーガー文庫」や、平成13年の建替え時に京都府立総合資料館から移管された昭和30年代を中心とした日本映画のシナリオ、戦前・戦後の教科書など、特色あるコレクションも含まれています。

平成7年以来、京都府と国立国会図書館の間で人事交流が行われており、筆者は平成31年4月から京都府立図書館に転向しています。約50名の職員が勤務する京都府立図書館は、企画総務部と図書サービス部の二つの部で構成され、筆者が所属する企画総務部連携支援課では、市町村立図書館・読書施設や学校への支援、大学図書館との連携、子どもへの読書活動支援、各種システムの管理など、多岐にわたる業務を担っています。

※日本の民主的教育を助けるため、昭和21年に京都で開館した図書館。米軍第6軍司令官ウォルター・クルーガーとその軍隊を顕彰して構想が練られたことから、その名を冠しています。



閲覧室の様子。晴れた日は館全体に柔らかな光が差し込みます。カウンターや閲覧席には新型コロナウイルス感染症対策のためパーテーションを設置しました。左下は国立国会図書館デジタルコレクション（図書館送信）の端末。

市町村立図書館・読書施設や大学図書館と連携した取組の大きな柱が、京都府図書館総合目録ネットワーク（K・Libnet）の運営です。府内の図書館等の蔵書を横断的に検索するK・Libnetシステムの構築に加え、ネットワークを用いて相互に貸し借りが行われた資料を搬送する「連絡協力車」を運行しています。各館の間で行き交う資料の数は増加の一途をたどり、物流の拠点である当館の市町村支援作業室は常に多くの資料であふれています。このような取組を通じて、南北に長い京都府全域に、均質な図書館サービスを提供するよう努めています。

学校への支援に関する取組の一つに、調べ学習や朝読書に役立つ図書を環境や文化など様々なジャンル・テーマごとに数十冊のセットにして、府内の小・中学校や府立学校に貸し出す「学校支援セット貸出」があります。小・中学校に対しては近くの市町村立図書館・読書施設へ、府立学校に対しては直接各学校へ、先ほど紹介した連絡協力車でセット



下は学校支援セットの資料。右上・右下は連絡協力車で届いた資料の仕分けを行う市町村支援作業室。各市町村や大学ごとに仕分け、コンテナに積み込んでいきます。



平成 13 年度に導入した自動化書庫の収蔵能力は約 40 万冊。毎月実施している館内見学では、大きなクレーンがコンテナを運ぶ様子を間近に見ることができます。



を届けています。令和元年度には京都府総合教育センターと連携し、新たに特別支援教育に役立つセットを追加するなど、毎年セット内容の充実と利便性の向上に努めています。

令和3年3月に予定している図書館システムの更新も、連携支援課が関わる大きなプロジェクトの一つです。資料の検索や貸出・返却処理などを行う基幹システムをはじめ、前述のK・Libnetシステムやホームページなどその範囲は広く、機器の更新も同時に行います。特にホームページはデザインを一新し、開館状況や図書館からのお知らせを分かりやすく表示するほか、学校支援セットの貸出状況を確認できるようにするなどの機能を追加する予定です。

筆者は平成20年に国立国会図書館に入館して以来、関西館、国際子ども図書館、そして東京本館での勤務を経験してきました。3つの施設はそれぞれ異なる特色を持ち、異動の度にまるで転職したかのような気持ちになることも少なくありませんでしたが、今回の出向はまさに文字どおりの「転職」。京都府立図書館



「こどもの居場所づくり」の様子。京都大学の大学（院）生とともに、学習や読書、科学体験などのプログラムを通して子どもたちが楽しく過ごせる居場所づくりに取り組みました。



(上)「図書無料お届けサービス」では受付開始から約5時間で先着600名程度の枠が埋まり、職員総出で2,000冊を超える図書の梱包作業を行いました。

(右下)「読書を通じた家庭学習支援事業」では約3万冊の図書を771箱の段ボールに詰め、府内各地の小学校に届けました。

(左下) 読書を楽しんだ子どもたちから届いたお礼の手紙。



で勤務を開始してから現在に至るまで、驚きや発見の連続で、刺激に富んだ日々を過ごしています。

特に、令和2年の3月以降、新型コロナウイルス感染症の拡大により多くのサービスを縮小せざるをえない状況のなかで、学習や読書、科学体験などを通じて子どもたちが楽しく過ごすための支援を行う「こどもの居場所づくり」や、外出自粛が要請されたゴールデンウィーク期間中に自宅で読書を楽しんでもらうため無料で図書を郵送する「図書無料お届けサービス」など、これまでにならなかつた新しい取組を企画し、非常に短い期間で実施につなげるスピード感は、これまでに経験したことのないものでした。

府内^(※)200の公立小学校1～3年生全児童と府立特別支援学校小学部全児童数分の図書を各学校に届けた「読書を通じた家庭学習支援事業」も、深く印象に残っています。「図書館から学校に本が届いたよ」と小学1年生の息子から聞いたときには、約3万冊という規模に圧倒されながらも、臨時休校中の子どもたち

※京都市立を除く。



に読書を楽しんでもらえるよう本を届けたという思いで職員が一丸となり取り組んだ光景が思い返され、感慨もひとしおでした。

これまでの京都府立図書館での勤務を振り返ってみると、他では得難い経験ばかりです。貴重な機会をいただいたことに感謝するとともに、間近に迫ったシステム更新をはじめ、様々な業務において、少しでも自身の知識や経験を還元し、よりよいサービスの提供につなげられるよう最後まで全力で駆け抜けたと思います。

神宮道にそびえ立つ平安神宮の大鳥居が竣工したのは昭和3年。実は京都府立図書館の建物の方が先輩だと館内見学で案内すると、驚かれる方もいらっしゃいます。1世紀以上にわたって収集してきた特色ある資料をもとに、時代の変化に柔軟に対応しながら、知的活動の拠点として京都府民を支える。歴史と新しさをあわせ持つ京都府立図書館で、今日もみなさんのご来館をお待ちしています。

表紙画家セレクション 第二輯

本誌は平成 20 (2008) 年 4 月号に A4 フルカラーにリニューアルして以来、表紙には、当館所蔵資料の中から、季節に合わせた美しい絵を選んできました。選ばれた絵たちは、浮世絵、作家のこだわりが詰まった版画集、美しい口絵で人気を集めた雑誌など、所蔵資料の多様性を表しています。表紙に登場した画家を取り上げ、その中から、「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧いただける絵を集めた「表紙画家セレクション」、第二輯です。

No.5

杉浦非水



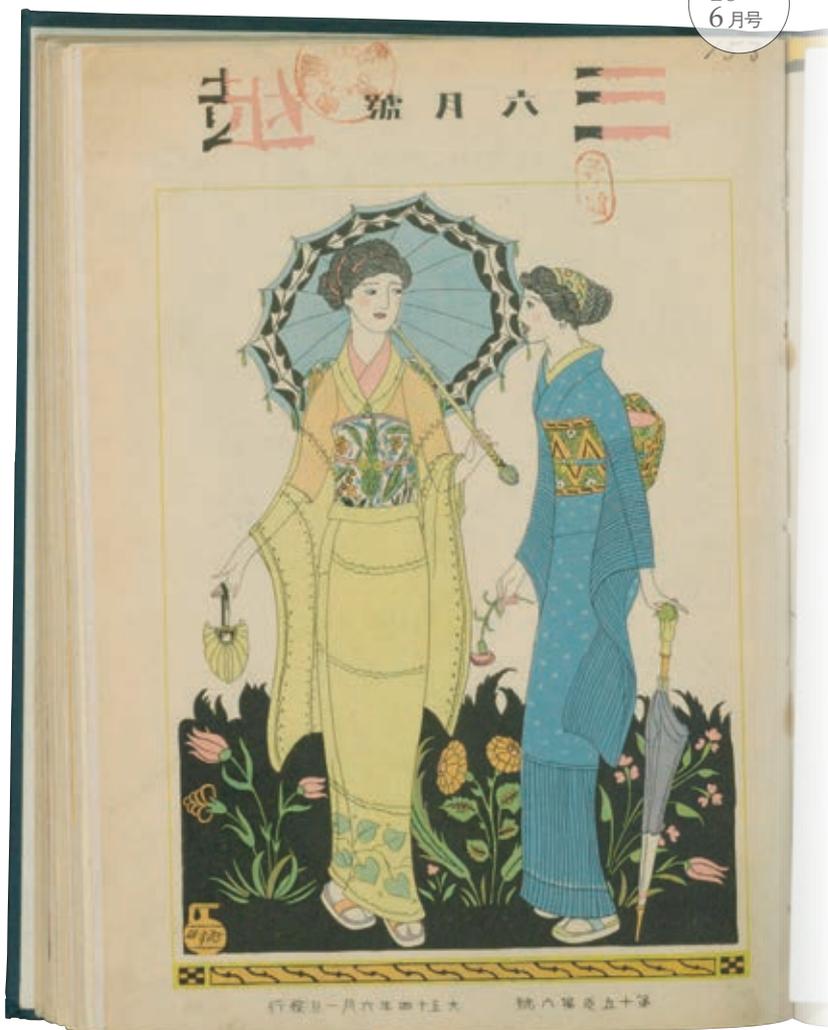
(1876-1965)

近代日本のグラフィックデザイナー。松山に生まれる。東京美術学校日本画科を卒業。アール・ヌーボーに刺激を受けて図案研究を志した。三越呉服店の図案部に籍を置き、グラフィック・デザインの分野を開拓する。東京地下鉄道開業広告ポスターやたばこのパッケージデザインも有名。著書に『非水図案集』『非水百花譜』など。

肖像：多摩美術大学提供。非水は多摩帝国美術学校（現・多摩美術大学）の初代校長を務めた。

「古代希臘より現代日本へ」

杉浦非水 画『三越』第 15 巻第 6 号 大正 14 (1925) 年 6 月 三越 26cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1524610/1> (国立国会図書館 / 図書館送信参加館内公開)



16年
6月号

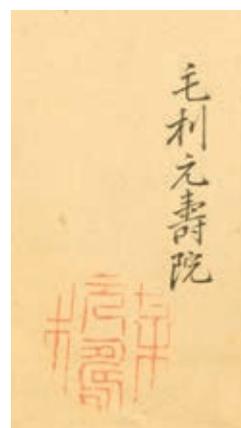
No.6 毛利梅園

08年
4月号



『梅園禽譜』から「鷓鴣」
毛利梅園 自筆 天保10 (1839) 序 1帖 27.8cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286915/47>

A4フルカラーリニューアルを飾ったのはこの絵!



(1798-1851)
江戸時代後期の本草学者。名は元寿。旗本の家に生まれ書院番をつとめた。植物、鳥、魚、菌類などの正確な写生図譜をのこす。『梅園草木花譜』『梅園介譜』ほか。
署名と落款：『梅園禽譜』より



『梅園草木花譜 春之部』から
毛利梅園 自筆 4帖 28.1×19.5cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287280/15>

09年
2月号

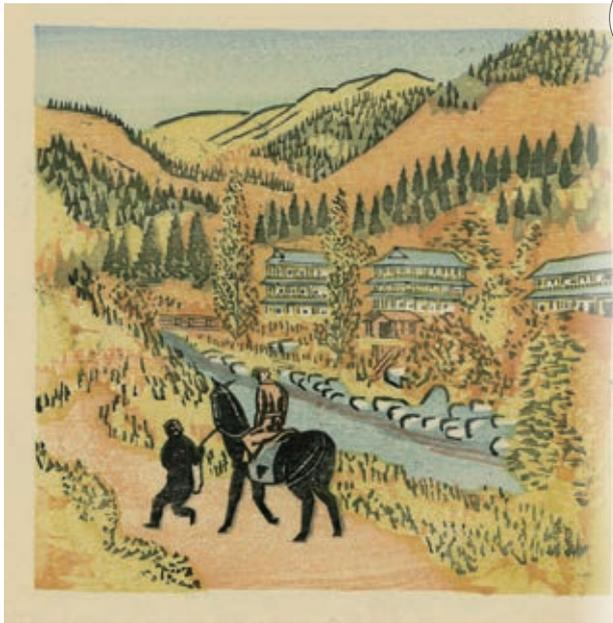
10年
8月号



『梅園草木花譜 秋之部』から
毛利梅園 自筆 4帖 28.1×19.6cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287291/16>

国立国会図書館

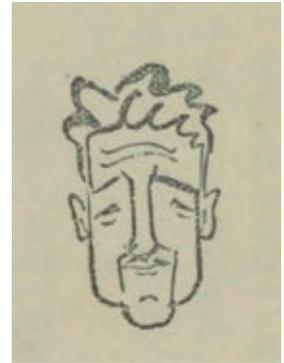
月報



17年
11月号

No.7

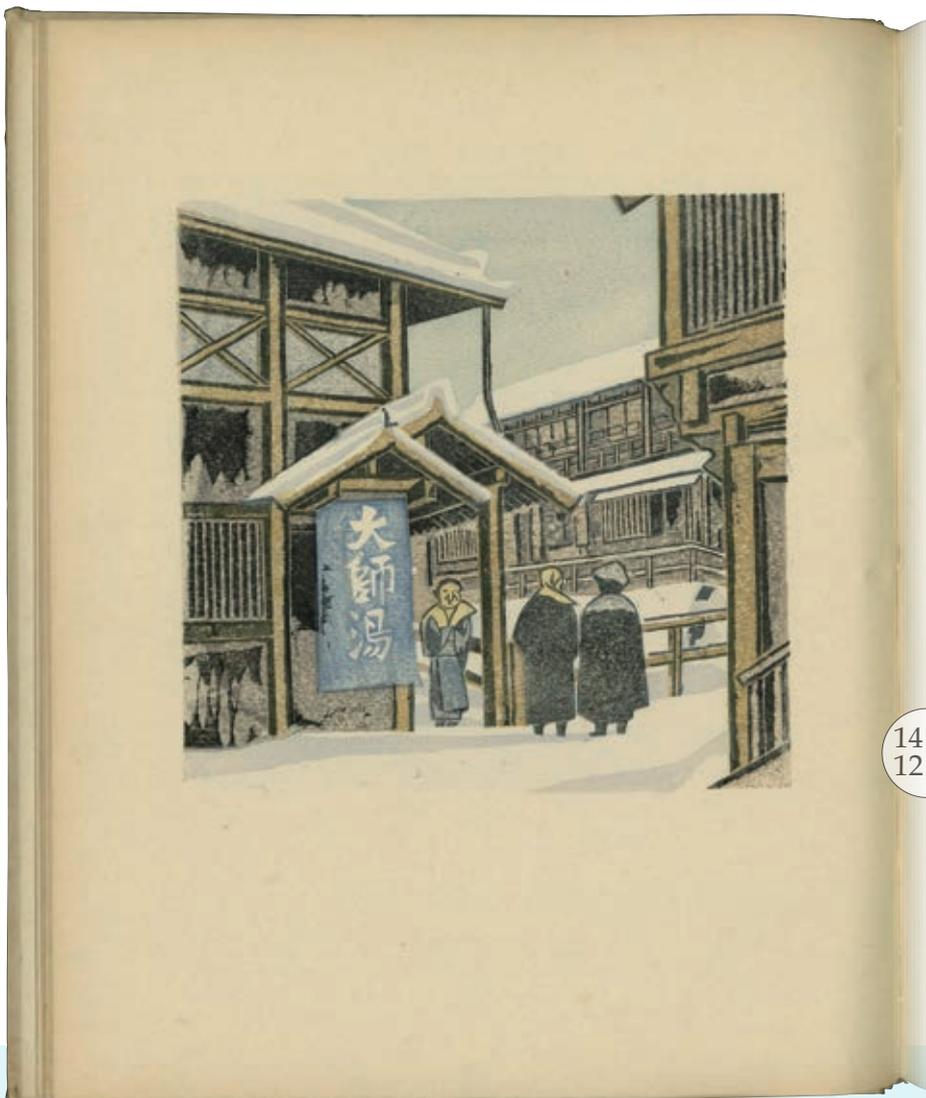
前川千帆



『浴泉譜 版画』から「梨木 群馬県」前川千帆画 アオイ書房刊 昭和16(1941)年 1冊 41×31cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8311980/29>
 (国立国会図書館 / 図書館送信参加館内公開)

(1888-1960)
 大正・昭和時代の版画家、漫画家。京都市出身。関西美術院に学び浅井忠、鹿子木孟郎に師事。東京バック社、読売新聞社で漫画を描くかわら、木版画を発表。各地を旅行し、温泉風俗や静かな風景を好んで描いている。作品に漫画「あわてものの熊さん」、版画「浴泉裸婦」など。

自画像：『新漫画派集団漫画年鑑』新漫画派集団編 文座書林 昭和8<請求記号 658-17>



14年
12月号

『浴泉譜 版画』から「別所 長野県」前川千帆画 アオイ書房 昭和16(1941)年 1冊 41×31cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8311980/43>
 (国立国会図書館 / 図書館送信参加館内公開)

No.8

橋口五葉

14年
11月号



「神戸之宵月」 橋口五葉 画 大正9 (1920) 1枚
30×48cm (『橋口五葉画集』所収)
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542911/3>



(1880-1921)

明治・大正時代の木版画家。鹿児島出身。橋本雅邦に入門、さらに東京美術学校西洋画科卒業。夏目漱石の『吾輩ハ猫デアル』を装丁。渡辺庄三郎を版元とする新版画の運動に参加、渡辺版画店より「浴場の女(ゆあみ)」を制作版行。「大正の歌麿」と形容された美人画をのこしている。「化粧の女」「髪梳ける女」など。

肖像：『かごしま歴史散歩』下堂園純治編 南洲出版 1977
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9770079/155> (国立国会図書館 / 図書館送信参加館内公開)

20年
6月号



「水鳥」 橋口五葉 画 大正9 (1920) 1枚 30×48cm
(『橋口五葉画集』所収)
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542911/12>

図書館

国会

立



どれもいい絵だなあ

月報

本屋に

ない

本



濱田徳海旧蔵敦煌文書 コレクション目録

氣賀澤保規 編 東洋文庫
2020.3 7, 344p ; 26cm
< 請求記号 HM1-M7 >

大蔵省で主に主税畑を歩んだ濱田徳海（1899・1958）が興亜院事務嘱託として中国に渡ったのは1939年のことである。その後の2年近くの滞在の間に、亡き母の供養のため敦煌文書を集め始めた。敦煌文書とは1900年に敦煌で発見された漢語仏典を中心とした数万点にものぼる古写本群で、当時、裕福な文化人が収集に励んでいた。濱田も伝手をたどって当代きつてのコレクターであった李盛鐸旧蔵の文書を手りするなどしたようだ。濱田は、帰国後も重要文化財保護委員会の援助も受けながら古書市場で収集を続け、その数は最終的に235点にのぼった。戦時中は山間の寺社にコレクションを疎開させるな

ど、その維持にはひとかたならぬ苦勞があったようである。濱田の没後、遺族はその遺志を踏まえてコレクションを一括して購入してくれる機関を探したが、当初は一括購入を予定していた国立国会図書館が48点を購入するに留まり（1962・63年）、またその仲介をしていた東洋文庫も購入を見送ったため、残りは同じく仲介していた古書店が買い取ることとなった。ここまでさらりと書いたが、実はコレクションの来歴どころか全容すら、一部関係者は把握していたと思われるものの、長らく不明とされてきた。その間、一部の文書が日中の古書市場に流れたり、2016年に36点もの文書が一挙に中国のオークション市場に出

品されたりして（その際、精細な図録が出版された）、断片的に存在が確認されることはあったが、濱田の遺志とは裏腹に、コレクションは散逸しつつあった。しかし、2017年になって事態は動いた。東洋文庫において、①濱田没後に作成された全品目録（作者不明）、②①と同時期頃作成の写真付全容目録（作者不明）、③1965年に遺族が東洋文庫に送付した目録、④1968年に石塚晴通氏（当時、東京大学大学院生）が行った現物調査記録の存在が改めて「確認」されたのだ。これら目録類を翻刻するとともに、関連先行研究も参照しながら整理・対照して一覧にまとめ

たものが本書である。これにより、濱田が収集した敦煌文書の全容が、半世紀を経てようやく明らかとなった。また、来歴についても、各文書に付された印記・揮毫や当時の古書目録の分析から相当程度明らかになっている。これらを踏まえ再現したのが小文の第一段落なのだが、コレクションをそのまま後世に伝えたいという濱田の想いは、本書によって少しは報われただろうか。世界各地に点在する敦煌文書を用いた研究は「敦煌学」と呼ばれ、東洋学における一分野を形成している。本書を契機として、濱田コレクションを活用した研究の一層の進展を期待したい。もともと、敦煌文書を扱う際に避けて通れない真贋問題もあるので、注意は必要なのだが。

（福林 靖博）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

NDL Topics

ウェブ講演会「新しい日常」における図書館 開催のお知らせ

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、今までの日常の生活が一変する中で、図書館は、どのように利用者及び職員の安全を確保しつつ、サービスを維持、発展させるべきでしょうか。国立国会図書館は、世界の図書館界を代表する国際図書館連盟（IFLA）のクリスティン・マッケンジー会長を講師にお迎えし、ウェブ講演会を開催します。コロナ禍におけるIFLA及び各国の図書館の対策事例、今後の国際連携の在り方などについてお話しいただきます。「新しい日常」における図書館を取り巻く状況について理解を深め、今後の図書館活動への一助となれば幸いです。

日英同時通訳付き、参加無料です。ぜひご参加ください。

- 日時 2月26日（金）14時～15時10分
- 開催方法 Zoomウェビナーによるオンライン開催
- 講師 クリスティン・マッケンジー氏（IFLA会長）
- 申込方法 ホームイベント・展示会のZoomによる申し込みフォームから2月19日（金）17時までにお申し込みください。定員（300名）に達した時点で受付を終了します。
- 問合せ先 総務部支部図書館・協力課協力係
メールアドレス：lecture@ndl.go.jp



クリスティン・マッケンジー氏

複写料金改定についてのご案内

令和3年1月4日（月）に複写料金を改定いたしました。

複写メニュー	色 / 資料形態	サイズ/分量	改定後（現行）（円）	改定前（円）
電子式複写 ・本などを普通紙にコピーします。 ・「セルフ」は関西館のみのメニューです。	白黒	A4・B4	26.40 (24+税)	25.30 (23+税)
		A3	45.10 (41+税)	44.00 (40+税)
		A2	127.60 (116+税)	126.50 (115+税)
		セルフA4・B4	16.50 (15+税)	15.40 (14+税)
		セルフA3		
	カラー	A4	100.10 (91+税)	99.00 (90+税)
B4				
A3	122.10 (111+税)	121.00 (110+税)		
電子情報等のプリントアウト ・「遠隔」は、遠隔複写サービスでデジタルデータの印刷を申し込んだ場合の料金です。	白黒	A4・B4	16.50 (15+税)	15.40 (14+税)
		A3		
		遠隔A4・B4	26.40 (24+税)	25.30 (23+税)
	カラー	遠隔A3	45.10 (41+税)	44.00 (40+税)
		A4・B4	38.50 (35+税)	37.40 (34+税)
		A3		
		遠隔A4・B4	61.60 (56+税)	60.50 (55+税)
遠隔A3	105.60 (96+税)	104.50 (95+税)		

○問合せ先
利用者サービス部 複写課
電話 03(3581)2331(代表)

複写料金については、当館ホームページでもご覧いただけます。
何卒、ご理解賜りますようお願い申し上げます。

新刊案内

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第286号

フランスの農産物及び食品の情報透明性に関する法律
ドイツの政党法
韓国の医療機器産業の支援に関する法律
中国民法典とその人格権編



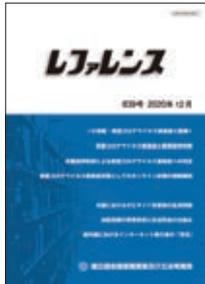
A4 124頁 季刊 1,800円(税別)
発売 日本図書館協会
ISBN 978-4-87582-870-9

レファレンス 839号

小特集「新型コロナウイルス感染症と医療」へ緒言
新型コロナウイルス感染症と医療提供体制
米国連邦政府による新型コロナウイルス感染症への対応
感染拡大防止と医療の確保のための施策
新型コロナウイルス感染症対策としてのオンライン診療の
規制緩和―日本及び米国の状況を中心に―

米国におけるオピオイド系薬物の乱用問題―今も続く公衆衛生上の危機―
送配電網の費用負担と託送料金の仕組み―再生可能エネルギーの主力電源化に向けた制度改革―

諸外国におけるインターネット媒介者の「責任」



A4 157頁 月刊 1,000円(税別)
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 346号

著作権利テラシーを育成する大学図書館

協学を支援するための新たな学習ハブとしての大学図書館の実現に向けた九州大学の取り組み
島根大学附属図書館デジタルアーカイブの「Authentication」導入

△動向レビュー▽

③の概要と主要APバージョン3.0の公開
プランS改訂版発表後の展開―転換契約等と出版社との契約への影響



A4 24頁 季刊 400円(税別)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会
〒104-0003 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812

第33回納本制度審議会

12月11日、第33回納本制度審議会が開催され、審議会委員13名、専門委員2名が出席しました。

審議会では、委員の交代(令和2年7月29日付け)及び出版物納入状況等について事務局から報告し、代償金部会の審議経過について奥野弘司部会長から報告されました。

あわせて、オンライン資料の補償に関する小委員会の審議経過について福井健策小委員長から報告されました。このうち、電子書籍・電子雑誌収集実証実験事業の総括及び有償等オンライン資料制度収集に向けた

課題の整理については事務局からも詳細を説明し、質疑応答が行われました。

納本制度審議会委員・専門委員名簿

(五十音順 敬称略) (令和2年7月29日現在)

会長

齋藤 誠 東京大学大学院法学政治学研究科教授

会長代理

福井 健策 弁護士

委員

植村 八潮 専修大学文学部教授

江上 節子 武蔵大学社会学部教授

江草 貞治 株式会社有斐閣代表取締役社長

遠藤 薫 学習院大学法学部教授

奥野 弘司 慶應義塾大学大学院法務研究科教授

小野寺 優 一般社団法人日本書籍出版協会理事

重村 博文 一般社団法人日本レコード協会会長

柴野 京子 上智大学文学部新聞学科准教授

永江 朗 公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員

根本 彰 東京大学名誉教授

平林 彰 一般社団法人日本出版次協会会長

堀内 丸恵 一般社団法人日本雑誌協会理事長

山口 寿一 一般社団法人日本新聞協会会長

専門委員

佐々木 隆一 一般社団法人電子出版制作・流通協議会監事

樋口 清一 一般社団法人日本書籍出版協会専務理事兼事務局長

代償金部会所属委員

奥野弘司(部会長)、江上節子(部会長代理)、小野寺優、重村博文、根本彰、福井健策、堀内丸恵

オンライン資料の補償に関する小委員会所属委員・専門委員

福井健策(小委員長)、植村八潮、遠藤薫、奥野弘司、柴野京子、永江明、根本彰、佐々木隆一、樋口清一

*審議会に関する情報は、左記に掲載しています。

ホーム▽資料の収集▽納本制度▽納本制度審議会

<https://www.ndl.go.jp/collect/deposit/council/index.html>

2

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2021.2

NO.718
FEBRUARY
2021

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
His Lordship's pipe organ
—*Nanki bunko fuzoku gotairei hoshuku kinenkan daifukin*
- 06 Strolling in the forest of books (25)
Edo period recipe books
—Food that is fun to read about and good to eat (Part Two)
- 13 Travel writing on Japanese libraries: Kyoto Prefectural Library
- 20 Artists whose works have graced the cover of the NDL Monthly Bulletin
(Part Two)
- 12 <Tidbits of information on NDL>
Watching legislative trends around the world
- 24 <Books not commercially available>
Hamada Norimi kyuzo tonko monjo korekushon mokuroku
- 25 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和3年2月号 (No.718)

令和3年2月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集責任者 三浦良文

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 1 . 2

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

六